

人間-自動車系の最適設計 (第 2 報)

On the Problem of an Optimum Design of an Automobile as a Man-Machine System (Report 2)

安 部 正 人*

Masato ABE

1. ま え が き

第 1 報において、筆者は一般的な最適設計の定式化と、系のあるパラメータが必ずしも一定でなく、場合によって種々の値をとり得る場合の問題について述べた。ところで、これまでの議論において、人間は自動車とは全く独立に、ある決まった操作を行なうとして、系の中に組み込んだ場合についての最適化を論じてきた。

しかし、人間-機械系の、特徴の 1 つは、その系の中の人間が、機械と無関係にある決まった操作を行なうのではなく、その機械に自分の能力の範囲で適応して、操作を行なうということである。そこで、ここでは第 1 報で述べた定式化をさらに拡張して、

(1) 人間は、その機械の特性に適応して、ある目標値を Optimum にすべく、自分の操作のパラメーターを調整して運転する、とした場合の系の最適化の問題。

(2) 人間は、パラメーター調整だけでなく、ある目標値を Optimum にすべく、最適制御を行なうとした場合の系の最適化の問題、についての一般的な定式化、および、これに付随した問題について述べることにする。

2. 機械の特性に適応して、人間が、操作のパラメーターを調整する場合

ここで取り扱う系が(1)で表わされるとする。

$$\dot{X} = A(q^*, v) \cdot X + D(q^*, v) \quad (1)$$

ここに $q^* \equiv (q_1^*, q_2^*, \dots, q_n^*)$ は人間の効果をしめすパラメーターで

$$J = F_J \cdot [f_J(X)] \quad (2)$$

を Min または、Max にするベクトル量である。このような系について

$$I = F_I [f_I(X)] \quad (3)$$

を Optimum にする $v \equiv (v_1, v_2, \dots, v_n)$ を求める。

v についての制約条件として、(4)を考える。

$$g_i(v) \geq 0 (i=1, 2, \dots), \quad G_j(q_j'(X)) \geq 0 (j=1, 2, \dots) \quad (4)$$

ここに、 F_J, F_I, G_j は、時間、その他に関するオペレーションである。この問題を第 1 報で述べた、線形計画による逐次近似で解くことを考える。

まず(4)を満足する任意の v を v_0 とする。このとき q^* を q_0^* とする。つぎに、微小量 Δv をとり、 $v = v_0 + \Delta v$ とする。ところで、 v と q^* の間には、ある関数

関係があるが、その関係が、連続、微分可能と仮定し、 Δv の変動に対して、 $q^* = q_0^* + \Delta q$ になるとする (Δq は微小)。この Δq は、(2)式の J を Min または、Max になるように決定されることになる。いま、(2)をさらに具体的な形で

$$J = \int_0^\infty (X_1 - X_{1,s})^2 \cdot dt \quad (2')$$

とすれば、 q^*, v で最適である条件は

$$\left(\frac{\partial J}{\partial q_i} \right)_{q=q^*} = 2 \int_0^\infty (X_1 - X_{1,s}) \cdot \frac{\partial X_1}{\partial q} \cdot dt = 0$$

$\Delta q, \Delta v$ が微小であるから上式を $\Delta v, \Delta q$ について、線形化する。

$$\begin{aligned} \frac{\partial J}{\partial q_i} = & 2 \int_0^\infty \left[(X_1 - X_{1,s}) \cdot \frac{\partial X_1}{\partial q} \cdot \Delta q + \frac{\partial X_1}{\partial v} \cdot \Delta v \right] \cdot \\ & \left(\frac{\partial X_1}{\partial q_i} + \frac{\partial}{\partial q} \left(\frac{\partial X_1}{\partial v} \right) \cdot \Delta q + \frac{\partial}{\partial v} \left(\frac{\partial X_1}{\partial q_i} \right) \cdot \Delta v \right) \cdot \\ & dt = 0 \quad (i=1, 2, \dots, m) \quad (5) \end{aligned}$$

$\left(\frac{\partial J}{\partial q_i} \right)_{q=q_0^*, v=v_0} = 0$ に注意して、 $\Delta q, \Delta v$ の 1 次の項までとると、

$$\begin{aligned} & \int_0^\infty \left[\frac{\partial X_1}{\partial q_i} \cdot \frac{\partial X_1}{\partial q} + (X_1 - X_{1,s}) \cdot \frac{\partial}{\partial q} \left(\frac{\partial X_1}{\partial q_i} \right) \right] \cdot dt \cdot \Delta q \\ & + \int_0^\infty \left[\frac{\partial X_1}{\partial q_i} \cdot \frac{\partial X_1}{\partial v} + (X_1 - X_{1,s}) \cdot \frac{\partial}{\partial v} \left(\frac{\partial X_1}{\partial q_i} \right) \right] \\ & \times dt \cdot \Delta v = 0 \quad (i=1, 2, \dots, m) \quad (6) \end{aligned}$$

ただし、(6)を計算するには、 q あるいは v についての(1)の、2 階の感度係数を計算する必要がある。

また、このような v に対して、 I は

$$\begin{aligned} I(q^*, v) = & I(v_0 + \Delta v, q_0^* + \Delta v) \\ = & I(v_0, q_0^*) + \frac{\partial I}{\partial v} \cdot \Delta v + \frac{\partial I}{\partial q} \cdot \Delta q \\ = & I(v_0, q_0^*) + F_I \cdot \left(\frac{\partial f_I}{\partial X} \cdot \frac{\partial X}{\partial v} \right) \cdot \Delta v \\ & + F_I \cdot \left(\frac{\partial f_I}{\partial X} \cdot \frac{\partial X}{\partial q} \right) \cdot \Delta q \quad (7) \end{aligned}$$

v についての制約条件も、 $\Delta v, \Delta q$ について線形化して、

$$g_i(v_0) + \frac{\partial g_i}{\partial v} \cdot \Delta v \geq 0 \quad (8)$$

$$\begin{aligned} & G_j(q_j' \{X(v_0, q_0^*)\}) + G_j \cdot \left(\frac{\partial q_j'}{\partial X} \cdot \frac{\partial X}{\partial v} \right) \cdot \Delta v \\ & + G_j \cdot \left(\frac{\partial q_j'}{\partial X} \cdot \frac{\partial X}{\partial q} \right) \cdot \Delta q \geq 0 \quad (9) \end{aligned}$$

* 東京大学生産技術研究所 第 2 部

研究速報
 Δv が微小であるから

$$-\delta \leq \Delta v_i \leq \delta \quad (i=1, 2, \dots, n) \quad (10)$$

ゆえに、設計変数を $\Delta v, \Delta q$ として評価関数を、

$$F_I \left(\frac{\partial f_I}{\partial \mathbf{X}} \cdot \frac{\partial \mathbf{X}}{\partial \mathbf{v}} \right) \cdot \Delta \mathbf{v} + F_I \left(\frac{\partial f_I}{\partial \mathbf{X}} \cdot \frac{\partial \mathbf{X}}{\partial \mathbf{q}} \right) \cdot \Delta \mathbf{q} \quad (11)$$

として、不等号制約条件(8), (9), (10), 等号制約条件(6)のもとでの線形計画問題を解き、 $\Delta \mathbf{v}^*$ を求めることができる。これを逐次くりかえしてこの最適化問題の解が得られる。

以上の定式化に付随して、次のような、最適化問題も解くことができる。いま、(1)式で示される系を考える。この場合人間は、例えば、比例+微分のフィードバック操作をすらし、ゲイン定数と微分時間を調整して J を Optimum にすると考える。このとき、 q_2 を微分時間として

$$I = q_2^*(\mathbf{v})$$

を Min にする \mathbf{v} を求める。すなわち、最も小さい微分操作で J を Min にすることができる系の設計を考える。

前と同じく、 $\mathbf{v} = \mathbf{v}_0 + \Delta \mathbf{v}$ を考える。

$$\begin{aligned} I &= q_2^*(\mathbf{v}) = q_2^*(\mathbf{v}_0 + \Delta \mathbf{v}) \\ &\approx q_2^*(\mathbf{v}_0) + \left(\frac{\partial q_2^*}{\partial \mathbf{v}} \right)_{\mathbf{v}=\mathbf{v}_0} \cdot \Delta \mathbf{v} \end{aligned}$$

J の形を(2')とすれば(6)式より、

$$\left(\frac{\partial q_2^*}{\partial \mathbf{v}} \right)_{\mathbf{v}=\mathbf{v}_0} = \frac{\partial \Delta q_2}{\partial \Delta \mathbf{v}} = \mathbf{Q}$$

ここに \mathbf{Q} は、 \mathbf{v} に対する q_2 の感度ベクトルである。ゆえに

$$I = q_2^*(\mathbf{v}_0) + \mathbf{Q} \cdot \Delta \mathbf{v}$$

ゆえに、(8), (9), (10) を制約条件にして、 $\mathbf{Q} \Delta \mathbf{v}$ を評価関数にした線形計画問題を解けば良い。

次に、使用条件や、環境によって変動するパラメータ $\mathbf{r} \equiv (r_1, r_2, \dots, r_k)$ を考え、(1')のような系を考える。

$$\dot{\mathbf{X}} = \mathbf{A}(\mathbf{r}, \mathbf{q}^*, \mathbf{v}) \cdot \mathbf{X} + \mathbf{D}(\mathbf{r}, \mathbf{q}^*, \mathbf{v}) \quad (1')$$

\mathbf{r} が、 $\Delta \mathbf{r}$ だけ変動した場合、これに適應して、人間は J を Optimum にすべく $\Delta \mathbf{q}$ だけ変動する。このときの $\Delta \mathbf{r}$ と $\Delta \mathbf{q}$ の関係は(6)式を導いたと同様にしてとなる。ゆえにこの式より

$$\begin{aligned} &\int_0^\infty \left[\frac{\partial X_1}{\partial \mathbf{r}} \cdot \frac{\partial X_1}{\partial q_i} + (X_1 - X_{1s}) \frac{\partial}{\partial \mathbf{r}} \left(\frac{\partial X_1}{\partial q_i} \right) \right] dt \cdot \Delta \mathbf{r} \\ &+ \int_0^\infty \left[\frac{\partial X_1}{\partial \mathbf{v}} \cdot \frac{\partial X_1}{\partial q_i} + (X_1 - X_{1s}) \frac{\partial}{\partial \mathbf{q}} \left(\frac{\partial X_1}{\partial q_i} \right) \right] \\ &\times dt \cdot \Delta \mathbf{q} = 0 \quad (6') \end{aligned}$$

ゆえにこの式より $(i=1, 2, 3, \dots, m)$

$$\frac{\partial \mathbf{q}}{\partial \mathbf{r}} = \frac{\partial \Delta \mathbf{q}}{\partial \Delta \mathbf{r}}$$

が求められる。これは一般に $m \times k$ のマトリクスである。ゆえに、 $\Delta \mathbf{r}$ の変動に対して、人間が適應して調整

すべき。 $\Delta \mathbf{q}$ は次のようになる

$$\Delta \mathbf{q} = \frac{\partial \mathbf{q}}{\partial \mathbf{r}} \cdot \Delta \mathbf{r} \quad (12)$$

この $\Delta \mathbf{q}$ を評価の基準に考えれば、 \mathbf{r} が変動しても、それに適應して調整すべき幅 $\Delta \mathbf{q}$ が小さい系の方が良い。たとえば、微小値 $\Delta \mathbf{r}$ が0のまわりに、独立に分散 $\sigma^2 \equiv (\sigma_1^2, \sigma_2^2, \dots, \sigma_k^2)$ の正規分布をすらすれば、 Δq_i の分散は、

$$\sigma^2(\Delta q_i) = \sum_{j=1}^k \left(\frac{\partial q_i}{\partial r_j} \right)^2 \cdot \sigma_j^2 \quad (13)$$

になるから、(13)を評価関数にすれば、使用条件、環境によるパラメータの変動に対する適應のしやすい系の設計をすることができる。第1報で述べたと同じように、(13)を評価関数にして、線形計画による逐次近似で最適値を求める場合には、 $\partial^2 \mathbf{X} / \partial q_i \cdot \partial v_j, \partial^2 \mathbf{X} / \partial r_i \cdot \partial v_j (i, j=1, 2, \dots)$ を求める必要がある。これは、(i)式を、 q_i, v_j または、 r_i, v_j で2階微分することによって得られる感度方程式の解である。

3. 機械の特性に適應して、人間が最適制御をする場合

ここでは、(14)式でしめされる系を考える。

$$\dot{\mathbf{X}} = \mathbf{A}(\mathbf{v}) \cdot \mathbf{X} + \mathbf{B}(\mathbf{v}) \cdot \mathbf{u}^*(t) \quad (14)$$

ここに、 \mathbf{u}^* は人間の操作をしめし、前と同様に、(2)を Optimum にする最適制御とする。ただし、 \mathbf{u}^* は、 t (時間)の関数であると同時に、 \mathbf{v} の関数でもあることに注意する。このような系について、(3)を Optimum にする \mathbf{v} を求める問題を考える。これも前と同様に、線形計画による逐次近似によって求めることができる。このときの線形評価関数の係数を計算するには、前と同様に $\partial \mathbf{X} / \partial \mathbf{v}$ が必要である。これは、(14)式を \mathbf{v} で偏微分することによって形式的に(15)式の解になることがわかる。

$$\frac{\partial \dot{\mathbf{X}}}{\partial \mathbf{v}} = \mathbf{A} \cdot \frac{\partial \mathbf{X}}{\partial \mathbf{v}} + \frac{\partial \mathbf{A}}{\partial \mathbf{v}} \mathbf{X} + \frac{\partial \mathbf{B}}{\partial \mathbf{v}} \cdot \mathbf{u}^* + \mathbf{B} \cdot \frac{\partial \mathbf{u}^*}{\partial \mathbf{v}} \quad (15)$$

(15)式を解いて、 $\partial \mathbf{X} / \partial \mathbf{v}$ を求めるには、 $\partial \mathbf{u}^* / \partial \mathbf{v}$ が必要である。すなわちパラメータ \mathbf{v} の変動に対する、最適制御 \mathbf{u}^* の感度を計算する必要がある。ここで、いま、人間が \mathbf{u}^* で Optimum にする評価関数(2)を、さらに具体的に u についての2次の汎関数の形で、(16)式のように書けるとする。

$$J = \int_0^\infty [(\mathbf{X}, \mathbf{Q} \cdot \mathbf{X}') + R u^2] \cdot dt \quad (16)$$

ここに、 \mathbf{Q} は $n \times n$ の positive definite matrix, R は正の定数とし、 $\mathbf{X}(t)$ および、 $u(t)$ には制約条件はないとする。これは結局、人間の最適操作 \mathbf{u}^* が、定係数系の state regulator 問題の解になっているということである。

このような問題の場合は、 $u^*(t)$ は、解析的に求めることができることがわかっている。すなわち

$$u^*(t) = -R^{-1} \cdot B' \cdot K \cdot X(t) \quad (17)$$

となり、線形フィードバック操作で最適化できる。

ここに、 K は $n \times n$ マトリクスで、次式の解である。

$$-K \cdot A - A' \cdot K + K \cdot B \cdot R^{-1} \cdot B' \cdot K - Q = 0 \quad (18)$$

ただし、 $'$ は、転置行列をしめす。

(17) 式を v_i で偏微分すれば

$$\begin{aligned} \frac{\partial u^*}{\partial v_i} = & -R^{-1} \cdot \frac{\partial B'}{\partial v_i} \cdot K \cdot X - R^{-1} \cdot B' \\ & \times \frac{\partial K}{\partial v_i} \cdot X - R^{-1} \cdot B' \cdot K \cdot \frac{\partial X}{\partial v_i} \end{aligned} \quad (i=1, 2, \dots) \quad (19)$$

また、 $\partial K / \partial v_i$ は、(18) 式を v_i で偏微分した (20) 式を満足する。

$$\begin{aligned} -\frac{\partial K}{\partial v_i} \cdot A - K \cdot \frac{\partial A}{\partial v_i} - \frac{\partial A'}{\partial v_i} \cdot K + \frac{\partial K}{\partial v_i} \cdot B \cdot R^{-1} \cdot B' \cdot K \\ + K \cdot \frac{\partial B}{\partial v_i} \cdot R^{-1} \cdot B' \cdot K + K \cdot B \cdot R^{-1} \cdot \frac{\partial B'}{\partial v_i} \cdot K \\ + K \cdot B \cdot R^{-1} \cdot B' \cdot \frac{\partial K}{\partial v_i} = 0 \quad (i=1, 2, \dots) \quad (20) \end{aligned}$$

(17) 式を (14) 式に代入すれば

$$\begin{aligned} \dot{X} = G X \quad \text{初期条件: } X(0) = X_0 \quad (21) \\ G \equiv A - B \cdot R^{-1} \cdot B' \cdot K \end{aligned}$$

この (21) 式が最適軌道 X を与える。また $\partial X / \partial v_i$ は、

(21) 式を v_i で偏微分した (22) 式の解である。

$$\frac{\partial \dot{X}}{\partial v} = G \cdot \frac{\partial X}{\partial v} + \frac{\partial G}{\partial v} \cdot X \quad (22)$$

(21), (22) 式を解くことにより、(19) 式から、 $\partial u^* / \partial v$ も求められる。以上のことから、人間が、機械に適應して最適制御をすとした系において、(3) を Optimum に

する v を求める問題も、線形計画の逐次近似で解くことができる。

例えば、(3) の評価関数の代りに (23) 式を使うとする。

$$I = \int_0^\infty c \cdot u^2 \cdot dt \quad (23)$$

この (23) 式が、人間の操作のエネルギーと考えれば、これを最小にする v を求めることにより、最も小さなエネルギーで (3) を人間が Optimum にすることができる系の設計が可能である。

次に、2. で述べたと同じパラメーター r を考え、

$$\dot{X} = A(v, r) \cdot X + B(v, r) \cdot u^* \quad (24)$$

なる系を考える。 r の変動に対する u^* の変動は、(19) 式を導いたのと同じように求めることができるから

$$\Delta u(t) = \frac{\partial u^*(t)}{\partial r} \cdot \Delta r \quad (25)$$

これが、 Δr の変動に適應して、変動すべき人間の操作である。この変動の目安として、

$$\int_0^\infty \Delta u(t)^2 \cdot dt = \int_0^\infty \left(\frac{\partial u^*(t)}{\partial r} \cdot \Delta r \right)^2 \cdot dt \quad (26)$$

を考え、 Δr がある既知の分布に従うとした場合の、(26) 式の分散を最小にする v を求めることによって、2. で述べたと同じく、 r の変化に適應する幅の小さくてよい系、すなわち適應しやすい系の設計ができる。

4. おわりに

第2報も一般的な定式化のみについて述べたが、現在具体的に、人間—自動車系の、評価と最適化の問題を解いている。今後これらについて述べたいと思う。

最後に、本研究を進めるにあたり、ご指導いただいている、第2部平尾教授、ならびに工学部井口助教授に謝意を表す。

(1969年8月8日受理)

